

社会化研究の源流と展開 I*

大 江 篤 志

端書き

本研究の基本モチーフとなっているのは社会化という考え方に対して筆者が感じてきた漠然とした違和感である。

筆者のもともとの個人的関心は、ふるさとと人生というもの — ふるさとにくらしている人々やくらしていた人々の人生、ふるさととその変化に根ざしており、これに対する社会心理学的アプローチが筆者の研究のフレームである。この研究のためのキー・コンセプトにしたのが社会化であった。というのはこれが個人、社会、文化の重なりあうところに成立し、また個人のライフスパンに対応しているので、筆者の問題関心にとってふさわしいと考えたからである。

こうしたアイデアを携えて地域社会でのフィールドワークを始めて暫くして感じたのは、社会化ははたして人々のくらしをきちんと掬い取っているのであろうかという疑問、地域社会の人々のくらしと社会化の考え方との間には何らかの齟齬があるのではないかという不確実感であった。このときに社会化とは別の考え方を選びなおせばよかったようなものであるが、それに替わりうるものは他に見い出すことはできなかった。そのため社会化の考え方に対する違和感の解消そのものがその後の筆者の研究主題の大半を占めるにいたっている。

この漠然とした違和感の源を突き止め、それをできるだけ明解な問題に仕立て、それに対する一定の答えを求めるために、これまでにいくつかの作業を進めてきている。本研究も社会化の考え方に対する違和感の解消という筆者の個人的関心の延長線上にある。

本研究の第一部はこの研究のための課題と方法にあてられている。第二部と第三部は研究結果の提示部であり、第四部はこれらの結果にもとづく社会化の考え方の問題点の指摘とその解決のための検討部分である。

*[謝辞]

本研究のためには社会化に関する相当数の研究論文を蒐集する必要があった。論文蒐集は筆者の大学院生時代から始められ、現在も継続中である。本研究をスタートさせるのに十分な研究論文を蒐集することができたのは東北大学図書館、山形女子短期大学（現東北文科大学）図書館、および東北学院大学図書館の皆様のご協力のおかげです。とりわけ東北学院大学泉キャンパス図書館の皆様には多大のお世話になりました。深く感謝し心より御礼申し上げます。

本研究のタイトルに掲げた「源流と展開」には2つの意味を込めたつもりである。

1つは社会化研究の始まりから現在にいたるまでの展開という意味であり、本研究のフィールドを意味している。ここでいう源流とは社会化研究の起点というほどの意味である。

もう1つは現行の社会化の考え方の再規定という形での問題点の解消と、それによる研究展開という意味での展開であり、この新たな社会化の考え方の歴史的起点という意味での源流である。しかしこの後者の意味での源流の探索は社会化の新たな考え方を俟たねばならず、したがってこの源流がいったいどこにあるのか、そもそもそれは存在しているのか否かは一番最後にしか答えることはできないであろう。一番最初の問題はおうおうにして一番最後にしか答えられないものである。

第一部 社会化の研究実践領域におけるフィールド研究に向けて：課題と方法

社会化の研究者が考えている社会化の概念とその研究活動との間にはどのような関係があるのだろうか、社会化研究者の研究実践を導いている社会化の概念とはどのようなものなのだろうか、またそれは研究者の研究実践をどのように導いているのだろうか。

本研究の主題は社会化の概念上の特徴を、社会化の研究実践と社会化の概念との対応関係という視点から浮き彫りにし、その問題点を社会化概念の再規定という形で解消しようとするところにある。そのためのフィールドは社会化の研究者コミュニティーにおいてこれまでになされてきた一群の社会化研究、個々の実証的研究や理論的研究の実践活動である。

ここに述べた研究主題は相互に密接な関係にあるとはいえ相互に独立している2つのテーマからなる。その1つは社会化の研究実践領域における社会化概念の特徴を定式化することであり、もう1つはこうしてえられた社会化概念の問題点を社会化概念の再規定という形で解消することである。前者をテーマⅠ、後者をテーマⅡとしておこう。

本研究は社会化概念の批判的検討という筆者の一連の研究課題の一部となっており、これらの研究との関係で成立している。

本研究に先行する筆者の研究の1つは現行の社会化の概念構成の特徴づけと、そこにおける問題点の洗い出しである。この作業は社会化研究実践領域においてリアルなものとして認められているもの、アカデミック・リアリズムのシンボルである現行の社会化の定義群そのものをフィールドにして進められてきた¹。

もう1つは地域社会をフィールドにして、そこにくらしている人々の生活のマンデイン・

¹ 大江（1978b, 1986a, 1990a, 1992, 2005c, 2007b, 2008, 2009a, 2009c, 2010a, 2010c, 2011, 2013a, 2013b, 2014）

リアリズムに即して行動の構成を定式化することである²。そうしたのは社会化の考え方が依って立っているもっとも基本的な事実是人々の現実の生活の経過に他ならないと考えたからである。

ここで表記上の便宜のために、現行の社会化概念の諸定義をフィールドにして構成された社会化概念を社会化概念 A、地域社会をフィールドにしてえられた行動の構成を社会化概念 C、そして本研究が構成しようとしている社会化概念、すなわち社会化研究実践領域において機能していると推定される社会化概念を社会化概念 B としておくことにしよう。

第一部では社会化概念 A と社会化概念 C を作業用具に用いて本研究の研究主題となっている社会化概念 B の定式化、すなわちテーマ I、および社会化概念の再規定、すなわちテーマ II を実際にアプローチできるような作業課題へと編成し、これらの課題を遂行するための研究方法の検討をおこなう。しかしこれらの作業用具を用いることがはたして妥当なのか — これ自体もこれからの作業の進行に応じて検討していかなければならない。

I 研究主題から作業課題へ：社会化概念の定式化に向けて

社会化の研究者コミュニティーの住民はいつでも、どこにいても研究実践に従事しているわけではない。社会化の研究実践領域とはこのコミュニティーの重要ではあるがその一部であり、個々の社会化研究実践を包摂している時空間的輪郭をいう。本研究では研究実践領域を研究活動そのものというよりは、その結果として最終的に産出されたもの、すなわち社会化の個々の研究論文や報告書の集合体として操作することになる。社会化概念 B とは社会化の研究者が研究論文を作成する過程で、その研究を方向づけていると想定される社会化概念である。

個々の研究論文は研究者の主観世界を研究者コミュニティーにおける一定のルールのもとに客体化したものであり、本研究の主題に照らして研究対象としてみなすことにはそれほど大きな問題はないだろう。

もちろん研究実践領域は研究者コミュニティーの他の条件、たとえば研究者コミュニティーの住民の属性、そこにおける支配的な思潮や理論、それに対する個々の研究者の関わり方、他の研究者コミュニティーとの関係、研究者相互の、あるいは研究者集団相互の関係から研究テーマに対する社会的要請と経済的支援、研究者の個人的な研究キャリア、研究関心や動機にいたるまでの多数の側面によって影響を被っているであろうから、これらの側面

² 大江 (1973a, 1980, 1981, 1982, 1983, 1984, 1985, 1986b, 1987, 1989, 1990b, 1991, 1992, 1994, 1995, 1997, 1998, 2002, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2007a, 2009b, 2010b, 2012, 2013a), Ooe (1973b, 1978a), 大江・細江 (1974), 大江・菊池・細江 (1976)

にも光をあてることが必要であろう（たとえば Jones, E.E., 1985）。しかしそうすることは現時点の筆者のキャパシティを超えている。今後の課題とすることにしたい。

本研究の分析対象は、こうして、これまでに提出されてきている社会化研究実践の結果としての研究論文となる。

このような事情から本研究は自ずと学史研究のごとき性格を帯びてこざるをえないのであるが、そうすること自体は本研究の趣意ではない。なぜかというとならば本研究の主題は社会化の研究史ではなく社会化の概念的妥当性の検討におかれているからであり、この主題に対する文献レビュー研究としての客観性と展開可能性を確保するために、一方では実証的な、他方ではダイナミックな研究スタイルを保持したいと考えているからである。

本章では上に掲げた2つの研究主題のうちテーマIのための研究フレームを構成し、それを用いてテーマIから作業課題を引き出していく。そのために第一節では本研究で用いる研究フレームを組み立てるために既存のフレームを比較参照し、第二節ではこの結果にもとづいて本研究の研究フレームを構成する。そして第三節では社会化概念Bを定式化するための作業課題が設定される。

1 研究フレームの構成のための既存フレームの検討

本研究の中心的な作業の1つは社会化の研究論文をテキストとする内容分析的作業となるであろう。そしてこれらを実証的かつダイナミックにとりあつかっていくためには、それに適合する研究フレームが必要であるだけでなく、それをできるだけ客観的に記述すべきであると筆者は考えている。

しかし文献レビューには実験法、ソーシャル・サーベイ法、検査法や測定法などのような定型的な研究手続きが確立しているとはいえない（大江；2007b）。そこで本研究の研究フレームを構成するための一助として、これまでに提出されてきている社会化の文献レビューのフレームを参照するところから着手することにしたい。

(1) 研究フレーム構成のための参照項目と参照論文

本研究の研究フレームの検討のために何に着眼してこれまでの文献レビューを比較参照するかがまずもって問題となるが、本研究のスタンスの1つは実証的研究にあるので、参照項目は既存のレビュー研究における定義、目的、対象、方法に関する記述内容とするのが適当であろう。実証的研究にはこれらの項目の充足が求められるのであるから、ここで検討すべき事柄はこれらの項目の充足度、およびこれらの項目間の関連の論理的一貫性になるであろう。

①定義

社会化研究のレビューをする以上、その研究者は社会化の意味内容を特定しておかないと

レビュー対象となる論文の選定、目的、対象の設定が不明確になるだろう。

②研究目的

文献レビューといえども、それぞれ固有の目的があるだろう。目的が同じでなければ、それが対象とするもの、それをあつかう方法が異なることも多いだろう。

③研究の方法論：分析フレーム

研究目的を達成するための方法に関する記述を分析フレームとしておく。これには対象論文の選定方法、目的達成のための着眼点、分析視点、分析技法などが含まれよう。

④研究対象：社会化研究実践領域に対する時空間フレーム

後にやや詳しく述べることになるが、社会化研究のスタートから現在にいたるまでの期間は他の社会心理学的概念と比べても決して短いものではないし、関連する学問分野や研究領域はずっと多岐にわたっている。そのために社会化の研究実践領域を研究対象としてとりあげるとなるとまず決めなければならないのが、その範囲の画定である。

ここでは既存の学史研究の時空間的フレームを時間的次元と空間的次元の2つの次元を用いて整理しておくことにする。

時間的フレーム：社会化研究の始まりから研究時点現在までのすべての期間を対象とする場合（時間的全体）と、その中のある特定の期間を対象とする場合（時間的部分）がある。もちろん個々の学史研究の研究時点現在によっても、また社会化をどのように考えるかによってもこの期間は伸び縮みする。

空間的フレーム：社会化研究の領域全体を対象とする場合（空間的全体）と、ある特定の領域を対象とする場合（空間的部分）がある。社会化研究の領域の幅は社会化研究の歴史的過程の中で変動しているので、研究時点現在を基準としたときの領域となる。

⑤参照論文の選択

社会化に関する研究論文は少なくないが、これに比べると文献レビュー研究は多いとはいえない（大江；2007b）。ここではその中でも比較的代表的なものをいくつかとりあげることにする。それらは、Child, I.L. (1954), Sewell, W.H. (1963), Clausen, J.A. (1968a), Wentworth, W.M. (1980), Goodman, N. (1985a, 1985b), Geulen, D. (1980, 1991), Dietrich, K.T. and Picou, J.S. (1998), Maccoby, E.E. (1992, 2007) の11編である。

(2) 参照論文の定義・目的・対象・方法

表1は本節でとりあげた参照論文における定義、目的、方法、対象を要約したものである。参照論文の全てがこれらの項目を立てているわけではない。そのため表1には筆者がこれらの項目に該当すると判断したものを掲げているが、Goodman (1985b) や Maccoby (1992, 2007) にみられるように目的と方法を区別しにくい場合もある。

表1 社会化の文献レビュー研究のフレーム

研究者	定義	目的	方法	対象
Child, I.L. (1954)	有り	明記されず	先行変数（社会化の仕方）と帰結変数（行動システム）の関係	時間的全体／空間的部分
Sewell, W.H. (1963)	有り	社会化の理論と研究における新しい展開	個人的な選択	時間的部分／空間的部分
Clausen, J.A. (1968a)	無し	人類学, 心理学, 社会学における社会化理論の展開	際立った研究, 最近のレビュー, 有望な研究プログラムに着目	時間的全体／空間的全体
Wentworth, W.M. (1980)	有り	社会化の社会学的視点の展開と社会化理論の再定式化	社会学主義と個人主義の2つのパースペクティブ	時間的全体／空間的部分
Geulen, D. (1980)	有り	社会化理論の前提となっている考え方	社会化の理論的パラダイムの起源と現行の社会化研究の関連性	時間的全体／空間的部分
Goodman, N. (1985a)	無し	社会化過程の社会学的概観	構造－機能主義と象徴的相互作用主義	時間的部分／空間的部分
Goodman, N. (1985b)	無し	社会化過程の発達の概観	前言語期と後言語期	時間的部分／空間的部分
Geulen, D. (1991)	有り	社会化の理論と研究の展開	明記されず	時間的全体／空間的部分
Maccoby, E.E. (1992)	有り	社会化研究の過去, 現在, 未来	親－子間の影響関係	時間的全体／空間的部分
Dietrich, K.T. & Picou, J.S. (1998)	無し	第一次社会化研究における理論的, 方法的展開	対象論文の選択方法; 主題のイメージ, 理論, 方法, 目的, 対象, 経済的支援源	時間的部分／空間的部分
Maccoby, E.E. (2007)	有り	社会化研究における主要な考え方とその変遷	家族内の社会化と親行動	時間的全体／空間的部分

①定義

11編の参照論文の中で研究者の定義が提示されているのは7編である（表2）。これらの定義はいくつかのタイプに分類される（大江；1992, 2013a）。個人が社会成員としての要件を獲得することによって所属集団の機能的成員になるという獲得タイプに該当するものが3編, 社会的パーソナリティの形成, 発達とする生成タイプが3編, 社会集団への加入を構造化する活動を社会化とする加入タイプが1編であった。

定義が明示されていない4編の著者たちは社会化の定義の存在を否定しているかというところではない。Goodmanの2編の論文は同一雑誌の同一巻号に連続して掲載されており, 2編目の論文（Goodman, 1985b）は1編目（Goodman, 1985a）の論文を踏まえて書かれているので読者からすると定義がなくとも大きな不都合はない。しかし1編目の論文にも定義はなく, その代わりに社会化の機能として文化伝達, 役割学習, アイデンティティの形成が掲げられている。Dietrich & Picou（1998）では社会化の定義や機能についての記述はみあた

表2 参照論文における社会化の定義の分類

定義のタイプ*	参照論文
獲得タイプ	Sewell, W.H. (1963), Maccoby, E.E. (1992, 2007)
生成タイプ	Child, I.L. (1954), Geulen, D. (1980), Geulen, D. (1991)
加入タイプ	Wentworth, W.M. (1980)
明示されず	Clausen, J.A. (1968a), Goodman, N. (1985a, 1985b), Dietrich, K.T. and Picou, J.S. (1998)

*定義のタイプは大江 (1992, 2013a) による

らないが、その下位過程としての第一次社会化 (primary socialization) を研究対象とすることが明言されている。Clausen (1968a) は、社会化を厳密に定義することは困難である (Clausen, 1968b) という理由から明確な定義づけをしていない。

Goodman (1985a, 1985b) と Dietrich & Picou (1998) にとって社会化は定義するまでもない周知の術語とみなされているようである。Clausen (1968a, 1968b) は社会化の定義を否定しているのではなく、むしろその概念内容の幅の広さを強調している。

こうしてみるとここでとりあげた 11 編の参照論文はどれも社会化についての何らかのイメージや概念をもっているといえる。

②研究目的

10 編が文献レビューの目的を明示している。これら 10 編に共通の目的となっているのが「社会化研究の展開」である。

これらのうち Clausen (1968a) は人類学、心理学、社会学における社会化研究、Wentworth (1980) と Goodman (1985a) は社会学における社会化研究というように、学問領域における研究展開のレビューを目的としている。これに対して Goodman (1985b) は社会化の段階に、Dietrich & Picou (1998) は第一次社会化に焦点をあてている、また Geulen (1980) は社会化理論の前提的な思想をとりあげており、これらは社会化の学問領域というよりはむしろ社会化の特定の側面についてレビューすることを目的としている。

そして社会化研究の展開過程を跡づけた後で理論のさらなる展開を目的に組み込んでいるのが Wentworth (1980)、社会化研究の展開を踏まえて社会化の構造を描出したのが Goodman (1985a)、社会化の段階を整理したのが Goodman (1985b) である。

Child (1954) には研究目的に該当する記述がないものの、その結論部分で非常に穏やかな言い方で精神分析学理論—学習理論のハイブリッド仮説が実証されているとはいえない、としていることから、彼は 1940 年代当時に支配的であった社会化の理論と研究の批判的検討を目的としていたといえる。そうすると 11 編の参照論文はともに社会化研究の展開過程の跡づけを基本的な目的としていると思われる。

③研究の方法論：分析フレーム

11編の研究方法もさまざまであるが、だいたい4つに分類されるだろう。

第1は方法が明示されていないものである。Geulen (1991)には方法に該当する記述が見あたらない。またSewell (1963)では、彼が示した社会化研究の新たな展開は「個人的な選択」であるとされている。たとえ個人的選択であったとしても選択基準はあったはずだが、その記述はない。

第2は方法に該当する記述として分析フレームが提示されているものである。これにはChild (1954)の先行変数と帰結変数、Wentworth (1980)の社会学主義と個人主義、Geulen (1980)の社会化理論のパラダイムと社会化研究、Goodman (1985a)の構造-機能主義と象徴的相互作用主義、Dietrich & Picou (1998)のいくつかの分析項目が該当しよう。

第3は対象とする社会化の側面に対する着眼点、アプローチの対象をあげているものである。これにはGoodman (1985b)の社会化の前言語的段階と後言語的段階、Maccoby (1992, 2007)の家族における子供の社会化と親行動 (parenting) が含まれる。

第4は対象とする研究の選択方法に関するものである。Clausen (1968a)は際だった研究や最近のレビュー、有望な研究プログラムに着目する、としているが、何をもって際だった研究、有望なプログラムとするかについては触れていない。Dietrich & Picou (1998)は論文選択のための方法を述べている。

④研究対象：社会化研究実践領域に対する時空間フレーム

それぞれの参照論文は時間的全体と部分、空間的全体と部分の組み合わせのいずれかに分類される (図1)。

時間的全体と空間的全体：現行の社会化研究のスタートを1920年代後半とすると、そこから参照論文の執筆時点現在までを対象とし、かつ社会化の研究領域全体を視野にいたしたものとしてはClausen (1968a)をあげることができよう。Geulen (1991)もこれに近いが研究領域がやや限定的なので、時間的全体—空間的部分に含めるのが妥当であろう。

		空間	空間的次元	
			全体	部分
時間的次元	全体	Clausen (1968a)	Child (1954) Wentworth (1980) Geulen (1980, 1991) Maccoby (1992, 2007)	
	部分		Sewell (1963) Goodman (1985a, 1985b) Dietrich & Picou (1998)	

図1 参照論文における研究対象領域

逆に時間的部分—空間的部分のタイプに該当するのが4編ある。Sewell (1963) は、論文執筆時点から過去5年間に焦点をあて、研究領域は役割アプローチと研究方法に限定している。Dietrich & Picous (1998) は“*Family Living*”誌とその後継誌“*Journal of Marriage and the Family*”誌に1939~1989年にかけて掲載された第一次社会化に関する研究文献を分析対象としている。また Goodman (1985a) は社会化の社会学的側面に、Goodman (1985b) は発達の側面に限定しており、先に指摘した方法との関係からすると時間的フレームも部分的である。

残りの6編については時間的には広い範囲をカバーしているが、研究領域としては心理学的、文化とパーソナリティ的な領域 (Child, 1954)、社会学領域 (Wentworth, 1980)、心理学領域 (Maccoby, 1992, 2007)、思想史 (Geulen, 1980)、心理学、社会学中心 (Geulen, 1991) と部分的である。

(3) 社会化の文献レビューにおける全体的・質的方法と分析的・量的方法

①参照論文における定義・目的・方法・対象の充足度と相互の連関

定義：研究者は何らかのタイプの定義に準拠している。ところがこれらの定義内容とそれに続く目的、方法、対象の選定との連関はそれほど明確ではない。論文中に掲げられた定義は当該の研究が社会化の研究であることの形式的な宣言にすぎないのだろうか。

目的：参照論文とした11編の目的は全く同じではないものの、どれもが社会化の理論と研究の展開過程をレビューしている。この点からしても、これらの論文の定義と彼らの研究目的との間には明確な関係をみいだすことは困難である。

方法：対象選択方法や分析フレームを満たしてはじめて方法といえるとするなら、11編の参照論文の多くは方法の記述が不十分なだけでなく、記述があったとしても方法としての基準を十分に満たしているとはいえない。

目的と方法の関係：目的や方法のそれぞれだけでは不十分な情報が、双方を加味することで理解がある程度うながされる場合もある。たとえば Child (1954)、Goodman (1985b)、Maccoby (1992, 2007) などがこれに該当しよう。このことは逆に目的と方法とが判然と区別されていない、あるいはそれぞれが自立していないともとれる。

対象：それぞれの参照論文の中には対象をはっきりと規定している場合もあるが、このような例はむしろまれであり、多くは対象範囲の画定理由を提示していない。

また時間的全体—空間的全体のタイプは Clausen (1968) の1例だけであり、他は研究領域を何らかの形で限定している。論文執筆のための紙幅の限定という条件を除けば、社会化研究は当初から研究領域が広がったか、あるいは時代が下るにつれて研究領域の拡張と専門分化が進行し、研究領域全体をカバーするのが困難になってきたかのどちらかといえるだろ

う。そうだとすると時空間的フレームを規定しているのは研究者の定義や研究目的というよりはむしろ研究者自身の専門分野であるかもしれず、あえて対象範囲について触れる必要もないのかもしれない。

項目間の連関：参照論文における定義、目的、方法、対象の各項目の記述内容は、これまでにみてきた限りでは、明細でないものが少なくないだけでなく、欠損項目さえみられる。さらにこれらの項目の間の連関が一貫しているとはいえない。この連関の程度を実証的研究論文が満たすべき公共性の形式的充足度とみなすと、Dietrich & Picou (1998)を除く10編の充足度は総体的に低い、といわざるをない。

それにもかかわらず — そして非常に興味深いことであるが — これらの論文の学史的記述が全く不完全かというところではないのである。学史的記述の完成度は研究フレームの記述の明確さには依存していないのかもしれない。

本研究の研究フレームを構成するにあたって、なぜこのようなことが起こっているのかを検討することは有益であると思われる。というのはまさしくこの点に文献レビューの特徴が潜んでいるかもしれないからである。

②学史の方法論

『広辞苑（第五版）』（1998, 岩波書店）には「学史」という項目はないので、正しい用語とはいえないかもしれないが（大江；2007b）、ここでは「学史」をある特定の学問や研究分野の歴史を一般的に表現することばとしておく。ふつうはある特定の学問分野の学史はその学問の名称をとって「～学史」（たとえば「心理学史」「社会学史」など）と呼ばれていて、学問的に定義づけられているのが普通である。

たとえば今田・今田（1981）は心理学史を次のように記している。

心理学史は広狭2つの意味に解せられる。狭義においては、現代の科学的心理学の歴史である。

心理学が独立した科学と認められるにいたったのは、1860～70年代であった。いかにして科学的心理学が発生し、また発達したか、そしてことにその独立後どのような変遷をへて、成果をあげたかということの歴史である。しかし現在の科学的心理学の問題は、その以前に哲学のなかにおいて論じられ、きわめて長い歴史をもっている。さらにさかのぼって人類はその原始時代から、心について深い興味と知識と解釈とをもっていた。ゆえに心理学史は広義においては、心に関する人類の知識と解釈との発達の経過をたどるものである。…

（今田恵，今田寛，1981, 440）

また社会学史については次のような説明がある。

広い意味で社会学の歴史的発展を扱う領域を指すが、その課題、方法、および範囲については、さまざまな見解がみられる。その最も一般的な立場は、これまで社会学の形成に関わってきた理論と方法をとらえ、それらの学説の相互関連を明らかにするとともに、それらが果たしてきた成果と位置づけを確定し、その展開の過程を辿ろうとするところにある。… (秋元律郎, 1993, 602)

これらの解説から推測されるのは学史ということにはある特定の学問の歴史研究のための対象や方法がすでに織り込まれているのではないか、ということである。そこで 11 編の参照論文にみられた定義・目的・方法・対象選択の間の関連の総体的な低さと、学史というものについての伝統的で一般的な考え方をあわせ考えてみると、本節でとりあげた参照論文の著者たちの多くはこうした学史観にたつて社会化研究の学史研究をおこなったのでないか、という推論がなりたつように思われる。定義・目的・方法・対象選択の間の関連の低さはこのことに起因しているのかもしれない。彼らにとり研究フレームは伝統的な学史観なのであり、それだから社会化研究の文献レビューのための方法を自覚的に意識する必要はないし、一から構築する必要もなかったのであり、そうであるからこそ参照論文の多くは当然のこととしてある特定の研究論文を社会化の研究として採用し、他のものは採用しなかったのだらうし、採用した論文を伝統的な学史観にもとづいて分析しレビューすることができたのであろう。

③伝統的な学史の方法論と実証的な学史の方法論：全体的・質的方法と分析的・量的方法

ところで文献レビューの対象としての研究論文は実証的研究におけるデータと同じようなものといえるであろうか。おそらくそれはデータ以前のものであろう。そもそも文献レビューの対象になる既存の研究論文は、いわば生の現実であって、研究のために加工されたデータではない、そのために逆にさまざまな角度からアプローチすることができる複合的な現実としかいいようのないものである。

ところが伝統的な学史の方法論には研究論文という生の現実を整理するための方法の細目が定められているわけではない。それだからこそ文献レビューをするには、その研究目的をできるだけ明確にするとともに、研究論文という生の現実に対する分析視角をきちんと整えておく必要があると思われる。

この条件を満たしているのは参照論文の中では Dietrich & Picou (1998) くらいのもので

ある。これ以外の論文ではこの点が不十分であるが、それにも関わらず充実した学史となっているのであるから、伝統的な学史の方法には生の現実を的確に把握するための隠された方法論が組み込まれているとしか考えようがない。それではそのような方法論とはどのようなものなのだろうか。

全体的・質的方法：考えうるのは伝統的なスタイルの学史研究者は対象とする論文のエッセンスをその特質に即して多元的・多面的・全体的にとらえているのではないか、ということである。これは生の現実に対する直接的で全体的な質的方法といえる。それを可能にさせているのがその研究者自身の能力と経験に裏打ちされた論文の解釈の正確さと独自性、洞察力と構築力なのであろう。伝統的な学史の方法論を突き詰めていったとき行き着く先にあるのはこれらの方面における研究者の力量なのかもしれない。もちろんこのことは実証的研究にもあてはまることであって、綿密に構成されたマニュアルに従えば優れた研究が可能になるわけではない。

このような伝統的な学史研究を特徴づけている全体的で質的な方法は研究者の力量によって、当の本人には当然のことであるがために、かえって客観的に表現されにくく、論理的な文章として記述されにくいかもしれない。参照論文の多くが研究方法としての公共性の充足度が低かった理由もこの点にあるようにも思われる。

分析的・量的方法：参照論文の中でこのような全体的・質的方法ときわめて対照的な方法を採用しているのが Dietrich & Picou (1998) である。彼らはパラダイム概念のもとに分析フレームを組み立てている。まず2種類の学術雑誌を共有されたイグゼンプラーとし、そこに掲載された1939～1989年までの論文から第一次社会化研究の論文として387編をピックアップし、さらにこれらからランダムサンプリングによって103編を研究対象として絞り込んでいる。そして主題のイメージ・理論・方法論・目的・研究対象・経済的支援源の6つの変数を設定しておいて対象とした論文を定量的に分析している。このような方法は全体的・質的方法に対して分析的・量的方法といえよう。

分析的・量的方法では分析対象となる研究論文の選択から分析項目の処理方法まで定められており、目的・方法・結果の連関が明確である。読者はこのタイプの学史研究がどのようにして対象とする研究論文を選び、それを何のために、どのような方法を用いて分析したか、そしてその結果がどうであったかをよく理解できる。その意味では実証的研究論文と同じスタイルをもち、実証的研究としての公共性の充足度が高い。

全体的・質的レビューと分析的・量的レビューの対照性は他の点についてもみられる。

両者の間にはデータ選択の基準にも大きなギャップがあるといえる。学史的出来事が一種の歴史事象であるとする、歴史研究で対象とする文書などのデータを特定のものに限定す

ることはありえるとしても、それらの中からランダム・サンプリングの手法で分析対象を選ぶことがあるだろうか、もしあったとしてもそれは果たして適切な方法といえるだろうか。Dietrich & Picou (1998) の研究はこの問題を回避することはできないだろう。

学史的展開過程の把握の仕方にも溝があるようである。歴史的事象を分析的・量的にあつかえば分析項目に沿ったデータは比較的正確に分析できるが、その項目から外れたデータをあつかうことはできない。そのために特定の側面については歴史的な推移を叙述することはできるが、それ以外の側面の推移については目を向けないので、それがとらえた歴史的推移がどのような力学で生じたかは手に余る問題となりかねない。それを可能にしているのが全体的・質的方法とそれを駆使できる研究者の力量ということになるのだろう。

これまでの参照論文の研究フレームの検討の結果としていえることは、

- a) 本研究は実証的研究スタイル, 研究方法の公共性を保持しようとしているのであるから、分析的・量的方法の利点を活用すること、および
- b) 本研究はダイナミックな研究スタイルを保持しようとしているために、全体的・質的方法のメリットを生かすこと、

の2点を本研究の研究フレームのための基本的方針とする必要がある、ということである。

2 研究フレームの構成

以下においては上の基本的方針に従って本研究の研究フレームを構成していく。

(1) 実証的アプローチ

①定義

本研究全体は社会化概念の再規定に向けられている。本研究自体が適切と判断する社会化概念は所与のものではなく、テーマIIの検討結果として与えられるはずのものである。したがってテーマIのためのフレームには筆者の社会化の定義は含まれない。

しかしそうすると本研究が分析対象とする研究論文を選択する際に筆者自身の定義を用いることはできないのであるから、論文選択の判断をすることもまたできない。それなら何をもってある論文を社会化研究の論文として同定できるのかという問題がおこってくる。

本章のテーマは社会化概念Bの定式化であるから、それを用いているはずの研究者コミュニティの判断にゆだねるのが妥当であろう。

②目的と方法：分析フレームとしての社会化概念A

次に問題となるのは社会化概念Bの定式化を達成するための方法である。社会化の研究者は自らが所属している研究者コミュニティにおいて流通し共有されている社会化の概念をアカデミック・リアリズムとして自らの研究を実践しているはずである。したがって

社会化概念B = 現行の社会化概念

である。

それでは現行の社会化概念とはいったいどのようなものであろうか。社会化の概念そのものは研究者の主観世界における考え方、イメージであり、それを直接みることはできない。そのために社会化の研究者コミュニティーでは研究者相互のコミュニケーションを可能にするために社会化の概念を言語的に定義し客体化している。したがって

社会化概念 B = 現行の社会化の定義

となる。

それなら現行の社会化の定義とはどのようなものであろうか。結論的にいうと、少数の例外を除けば、それぞれの研究者の社会化の定義は大なり小なり異なっている。社会心理学における主要概念によくあるように、社会化の研究者コミュニティーにおいても唯一共通の定義は存在していないのである（大江；1992）。そのためたくさんある社会化の定義の中のどれか1つを社会化概念 B として特定することはできない。

この問題を克服するためには、社会化の個々の定義は何らかの形で社会化の概念を反映していると仮定した上で、現行の社会化の定義の背後にあると考えられる社会化の概念を個々の定義をとおして推定する他はない。筆者が構成した社会化概念 A とは現行の諸定義から推定した社会化概念の共通モデルのことであった（大江；1986a, 1992）。

ところがこの共通モデルにもいくつかの下位型があり、その特徴に応じて獲得タイプ、生成タイプ、自我発現タイプ、社会的形成タイプ、加入タイプ、伝達タイプの6つに分類された（大江；1992, 2013a）。

これらの共通モデルの6つの下位型をその共通性に着目してさらに統合した結果、獲得タイプ、生成タイプ、自我発現タイプ、社会的形成タイプ、加入タイプの5つを定義 I、伝達タイプを定義 II とすることができた。定義 I は社会学的社会化概念と心理学的社会化概念に一般的な共通モデルであり、定義 II は文化人類学的社会化概念に特徴的な共通モデルである（大江；2013a）。そこで、

社会化概念 B = 社会化概念 A
 = 社会化の共通モデル
 = 獲得タイプ、生成タイプ、自我発現タイプ、
 社会的形成タイプ、加入タイプ、伝達タイプ
 = 定義 I、定義 II

と措定することができる。

もし個々の社会化研究論文が現行の社会化概念によって導かれているなら、その社会化概念は社会化概念 A となるし、個々の研究論文で規定されている社会化の定義もまた社会化

概念 A となるはずである。つまり社会化概念 B は社会化概念 A と一致するはずである。

社会化概念 B を定式化するための分析フレームはしたがって社会化概念 A となる。本研究では個々の研究論文が社会化概念 A を満たしているか否かが検討課題の 1 つとなる。

個々の研究論文が社会化概念 A を満たしているならテーマ II で検討するのは社会化概念 A だけになる。しかし社会化概念 A を満たしていないなら、社会化概念 B は社会化概念 A とは別物ということになり、テーマ II での検討課題は社会化概念 A と社会化概念 B の 2 つとなる。これが社会化概念 A をテーマ I の分析フレームとすることの意味である。

③研究対象：時空間フレーム

本研究は可能な限り社会化の研究実践領域の全体を対象にしようとしている。それは社会化の概念が時代や学問研究領域によって同じでない可能性があるからであり、社会化概念の批判的検討をおこなうためには原則的に全体を対象とすべきであると考えからである。

(a) 空間的フレーム

社会化の研究実践領域は伝統的な社会学、心理学、文化人類学の領域を超えて教育学、政治学、体育学、経営学など多方面にわたっている。

本研究ではこれらの中から特定の領域、特定の種類の論文を限定的に選択するという方法は採らない。なぜなら社会化概念 B は個々の社会化研究実践において機能しているはずの社会化概念であり、しかもそれは、社会化の共通モデルがそうであるように、ただ 1 つの概念となっているとは限らないことを考慮すると、本研究が対象とする社会化の研究実践領域は理想的にはそのすべてでなければならなくなるからである。

その場合、1 つの条件を設けなければならぬ。それは社会化の研究論文とは社会化の研究者コミュニティでそれとして認められている論文である、という条件である。社会化概念 B が社会化の研究実践領域で機能している概念であるとするならば、本研究の文献レビューの対象となる研究論文は社会化の研究者コミュニティで社会化研究として認められたものでなければならぬからである。

(b) 時間的フレーム：社会化研究史におけるパラダイムシフトと概念ラベリング

一般に社会化研究の始まりは 1920 年代後半から 1930 年代前半にかけてとされている。しかし筆者はそのスタートは 1890 年代にあると考えている（大江；2005c, 2013b）。すでに別のところで示唆していることだが 1890 年代に始まった社会化研究は 1920 年代後半に生じたパラダイムシフトを経て、現在にいたっていると考えられるのである。それは社会化の社会過程論的研究から社会構造論的研究への変化であるといえる（大江；1978b, 2008, 2009a, 2010a, 2013b）。これに従うと現行の社会化研究はパラダイムシフト後の社会構造論的パラダイムのもとでの研究である。

こうして本研究でフィールドとする社会化の研究実践領域の時間的フレームは 1890 年から本研究時点までとなる。しかしこの間のパラダイムシフトの存在を仮定すると、これまで用いてきた社会化概念 A はパラダイムシフト以後のものになり、それ以前の概念に対する名称が必要となる（表 3）。

表 3 社会化概念に対するラベリング

概念フィールド	パラダイムシフト以前	パラダイムシフト以後
定義フィールド	社会化概念 A1	社会化概念 A2
研究実践フィールド	社会化概念 B1	社会化概念 B2
地域社会フィールド	社会化概念 C	社会化概念 C

④ 社会化概念 A1 と社会化概念 B1

これまでの社会化概念 A と社会化概念 B は、新たな概念ラベリングを用いると、社会化概念 A2 と社会化概念 B2 になり、社会過程論的パラダイムにおけるそれぞれは社会化概念 A1 と社会化概念 B1 になる。

それなら社会化概念 A1 と社会化概念 B1 とはどのようなものであるか。社会化概念 A1 はまだ定式化されていない。社会化概念 A1 と社会化概念 B1 の定式化のための構成フレームは、研究実践領域が社会過程論的パラダイムにおけるそれであることを除くと、原則的に社会化概念 A2 と社会化概念 B2 のための研究フレームと同じである。

⑤ 社会化研究実践領域におけるパラダイムシフト仮説の検証

社会化の社会過程論的研究から社会構造論的研究へのパラダイムシフトは筆者の仮説にとどまっている。この検証のための研究フレームは社会化概念 A1 と社会化概念 A2 との、また社会化概念 B1 と社会化概念 B2 との比較法になるであろう。

(2) 社会化の文献レビューのためのダイナミック・アプローチ

分析的・量的方法は実証的研究の代表例の 1 つであり、なによりも研究の方法と技法の客観性を保持しうる。しかしこの方法は研究対象の限定化と表裏一体の関係にあり、その研究がとりあげる変数以外のものは視界から閉ざされる。そのために分析的・量的方法による文献レビューでは生の現実としての社会化研究の展開過程のダイナミックな動きをとらえることが容易ではなくなる。

このことのために、先にも述べたように、本研究は研究フレームの公共性を充足させるために実証的アプローチを採用するが、それと同時にダイナミックなアプローチも用いようとするのである。しかしこのことは社会化概念の展開に関わる問題であり、社会化概念 B の定式化というテーマ I の問題というよりはむしろテーマ II の問題であるので、次の第二章で

とりあげることになるであろう。

3 テーマ I による課題の編成

社会化概念 A を用いて分析対象データとしての社会化の研究論文から社会化概念 B を定式化することがテーマ I のための研究フレームであった。しかし「社会化概念 A」ということばだけでは社会化概念 B を定式化するための作業用具の用をなさない。そのため社会化概念 A を操作して変数へと変換する必要がある。この変換作業によってテーマ I による課題を編成することが以下の各節の目的となる。ところが社会化研究におけるパラダイムシフト以前の社会化概念 A1 は現時点ではまだ定式化がなされていないので、社会化概念 B1 のためのフレームは未完成状態である。そのために社会化概念 A1 と社会化概念 B1 の定式化作業がほぼ同時過程的に進められなければならない。また本研究で想定されている社会化の研究実践領域における社会過程論的パラダイムから社会構造論的パラダイムへのシフトの仮説を検証するための課題も構成されなければならない。

社会化概念 A1 が未確定状態にある現状を考慮し、次の第四節で社会化概念 B2 を定式化するための作業課題を提出し、第五節で社会化概念 B1 のそれへと進み、第六節で社会化研究実践領域におけるパラダイムシフト仮説を検証するための課題を構成していく。

4 テーマ I による課題の編成：社会化概念 B2 のために

本節では社会化の共通モデル（大江；1986a, 1992）を変換装置として用いて社会化概念 A2 を変数化し、社会化概念 B2 を構成するための作業課題を編成する。そのために最初に社会化の共通モデルをかいつまんで示し、次に共通モデルを構成している概念成分を用いて作業課題を編成していく。なお定義 I は個人レベル、定義 II は社会・文化レベルにあるので課題編成はそれぞれに分けておこなうことになるだろう。

(1) 定義 I における作業課題

定義 I における社会化の共通モデルはいくつかの概念成分によって記述される。その中の 1 つに「活動対象」成分がある。これの外延としてよくあげられるのが個人が所属集団の成員性を獲得するための要件であり、知識、態度、志向性、技能、思考方法、価値、要求、動機づけ、衝動統制、認知的・攻撃的・意欲的パターン、社会的地位・役割、行動パターンなどである。これらは“personal system properties (Inkeles, 1969)”，または“personal yet social attributes” (Inkeles, 1968) などと要約されるものであり、ここでは Inkeles (1969) の用語を用いて「PSP」と略記しておこう。これを用いると定義 I における社会化の共通モデルは、「PSP のない個人が PSP を備えた個人へと変化する過程」「PSP を備えていない個人が、ある種の活動をとおして、PSP を備えた人間へと向かう過程」「PSP を備えていない個人が、それを備えた人間になるように、ある種の活動をしていく過程」などと記述される。

①定義Iにおける共通モデルの構成

a) 構成：社会化の共通モデルには2つ、あるいは3つの事態が想定されている。

それらは、個人がPSPを備えていない事態、PSPを備えた事態、そして両者を媒介する事態の3つであり、最初の事態を先行事態、最後の事態を帰結事態、そして媒介事態を活動事態といっておこう。2つの事態の場合、先行事態に活動事態を含め、先行事態と帰結事態の2つになる。

b) 概念成分：共通モデルにはいくつかの概念成分が組み込まれている。1つはそれぞれの事態において活動している「主体」であり、定義Iでは個人となる。1つはこの主体がおこなう「活動」、すなわちPSPの獲得や発達・形成に関わる活動であり、もう1つは活動が向けられる「活動対象」、すなわちPSPである。そして最後に「過程」があげられる。しかしこれらのレベルは同じではなく、もっとも中核的な成分が過程である。

c) 3つの補助概念：社会化の共通モデルには含まれていないが、それを支えている補助概念が少なくとも3つある。これらはエージェント、生涯性、および場である。

エージェントとは社会化の主体に影響を及ぼす人物や集団、組織などである。生涯性は社会化が個人のライフスパンをとおして進行することを意味する。場とは社会化の事態が生起する社会・文化的な空間をいう。

d) 共通モデルの構成：このように社会化の共通モデルは「主体」「活動」「活動対象」からなる「先行事態」「活動事態」「帰結事態」、およびこれらが時系列的に推移する「過程」から構成されている。

社会化とは先行事態が活動事態を経て帰結事態へいたる過程、あるいは先行事態から帰結事態にいたる過程である。

②個別的な社会化概念 B2

社会化概念 B2 を構成する作業は2つの段階を経る。

第1の段階は本研究が分析対象とする個々の社会化研究論文における社会化概念 B2 を特定することである。

それぞれの社会化研究論文が社会化概念 B2 によって導かれているとしても、それぞれの研究論文が全て同じ社会化概念 B2 によって導かれているとは限らない。個々の社会化研究論文における社会化概念 B2 が共通同一であるという保証はどこにもないのである。

そのために最初にそれぞれの研究論文について、その論文における社会化概念 B2 を特定していく作業が不可欠となる。このような社会化概念 B2 はある特定の社会化研究論文において機能しているとする、このレベルでの社会化概念 B2 は一般性を欠いている。本研究が対象とする社会化研究論文数と同じだけの数の社会化概念 B2 が存在する可能性がある

いう意味で、これらを個別的社会化概念 B2 としておこう。

③作業課題：個別的社会化概念 B2 の特定作業

個別的社会化概念 B2 の特定作業は、以下の手続きによって、本研究が対象とするそれぞれの社会化研究論文についてなされる。

- (a) 個別的社会化概念 B2 の特定のために共通モデルの 4 つの成分、3 つの事態、および 3 つの補助概念のそれぞれを分析項目としたとき、それぞれの項目をセルとみなし、
- (b) 特定の研究論文の内容のうちこれらのセルに対応する内容を変数としてそのセルに投影したとき、
- (c) それぞれのセルがどのような変数によって投影されているか、あるいは投影されずに空になっているセルがあるとすればそれはどのセルであるかの確認作業をおこない、
- (d) 空になっているセルをその概念枠組から取り除いたとき、その枠組上に残された変数付きのセルの分布を、
- (e) 当該論文の個別的社会化概念 B2 として記述する。

この手続きによって特定された個別的社会化概念 B2 は二次元的な概念枠組上の特定数の変数の布置の形をとるであろう。

④作業課題：個別的社会化概念 B2 による社会化概念 B2 の定式化

個別的社会化概念 B2 はある特定の論文に固有の概念であるかもしれないので、それ自体としては概念としての一般性と共通性を欠いている。そのために社会化概念 B2 を定式化するためにはこの個別性を一般性へと変換する必要がある。

このために必要な作業は全ての個別的社会化概念 B2 の積み重ね法において他にはないだろう。すなわち、

- (a) 本研究で対象とする全ての研究論文の二次元的な個別的社会化概念 B2 を積み重ねたとき、それぞれのセルの分布と各セル内における変数の出現頻度をもとにして、
- (b) 概念枠組上に出現頻度の程度に高低差のあるセルの三次元的な分布をえたとき、
- (c) これらの立体的な布置として社会化概念 B2 が記述される、

という方法による作業がなされるであろう。

この作業が社会化概念 B2 という一般性を有する概念につながる根拠は 2 つある。

1 つは本研究は原則として研究対象を社会化研究実践領域の時空間的全体としているのであるから、少なくとも本研究の遂行時現在においては、可能な限り多くの個別的社会化概念 B2 を集積しているはずであり、したがってこれらの積み重ねからえられた社会化概念 B2 はこの時空間の中における個別的社会化概念 B2 と最大の共通性を有するという限りにおいて一般性をもっているはずである。

もう 1 つは個別的社会化概念 B2 は社会化の定義群に共通する共通モデルの概念成分によって構成された社会化概念 A2 を媒介して特定されたものであるから、その限りにおいて方法的な一般性をもっているだろう、というものである。

⑤作業課題：社会化概念 B2 における下位概念

社会化概念 B2 が社会化概念 A2 の共通モデルを介して構成されるなら、定義 I における 5 つの下位型が社会化概念 B2 に投影される可能性がある。つまり社会化概念 B2 にも社会化概念 A2 に対応するような下位型が存在する可能性がある。これらの下位型は個々の個別的社会化概念 B2 の構成面での特徴を比較することによって確認する必要がある。なぜならもし下位型が存在するなら、社会化概念 B2 の問題点もそのタイプに応じて特定する必要があるかもしれないからである。

(2) 定義 II における作業課題

定義 II の共通モデルは「文化の世代間伝達」「文化が伝達される過程」と記述される。

文化は定義 I における PSP の構造的総体であるとする、定義 II は明らかに個人のレベルを超えた概念であり、したがってそれを伝達するものも個人を超えたレベルにあるはずのものである。

①定義 II における共通モデルの構成

定義 II の共通モデルの概念成分の 1 つは「文化」である。1 つは 2 つの「世代」すなわち文化を伝達する側の世代とそれを伝達される側の世代である。上のモデルには明示されていないがもう 1 つの成分が想定される。それは世代から世代へと文化が伝達される「メカニズム」あるいは「伝達装置」である。

定義 I に比定すると、文化が伝達される前の事態が先行事態、伝達途上の事態が活動事態、文化が伝達された後の事態が帰結事態となるであろう。

②作業課題：個別的社会化概念 B2 の特定

定義 II における個別的社会化概念 B2 は定義 I の場合と原則を同じくする方法で特定することになる、すなわち個別的社会化概念 B2 の特定化作業のために文化、2 つの世代、伝達装置、および 3 つの事態の成分を用いることになるであろう。

③作業課題：個別的社会化概念 B2 による社会化概念 B2 の定式化

定義 I と同様に定義 II の個別的社会化概念 B2 の積み重ねにより定義 II の社会化概念 B2 の定式化の作業がおこなわれる。

5 テーマ I による課題の編成：社会化概念 B1 のために

社会化概念 B1 の定式化のためには社会化概念 A1 の構成を行う必要がある、その作業から始めなければならない。

(1) 作業課題：社会化概念 A1 の構成

①作業課題：定義の収集

社会過程論的パラダイム下における社会化の定義の収集が社会化概念 A1 の定式化のための最初の作業となるが、その方法は基本的に社会化概念 A2 の定式化を試みた大江（1986a, 1992）のそれに従うことになるであろう。

定義の収集にあたっては収集対象となる期間について注意する必要がある。社会化研究において社会過程論的パラダイムが支配的であった期間を筆者は 1890 年代から 1930 年代までと考えている。しかし 1930 年代前後には社会構造論的パラダイムへの変換が生じているため、両パラダイムの移行期間となっている。そのためこの重複時期にあらわれた定義がどちらのパラダイムに属するのかは慎重に判断されなければなるまい。

②作業課題：社会化概念 A1 の共通モデルの構成

社会化の諸定義から社会化概念 A1 の共通モデルを構成する作業も基本的には社会化概念 A2 の共通モデルの構成をおこなった大江（1986a, 1992）に準拠することになるであろう。

この作業をとおして社会化概念 A1 の共通モデルの概念成分、および補助概念がえられることになるであろう。

(2) 作業課題：個別社会化概念 B1 の特定

社会過程論的パラダイム下における個々の社会化の研究論文について社会化概念 A1 を用いて個別社会化概念 B1 の特定作業がなされる。このための方法は社会化概念 A2 の共通モデルを用いて個別社会化概念 B2 を特定した作業のそれと同じであろう。

(3) 作業課題：個別社会化概念 B1 による社会化概念 B1 の定式化

個別社会化概念 B1 の積み重ねをとおして社会化概念 B1 を推定する作業が行われる。この場合の方法も個別社会化概念 B2 から社会化概念 B2 を定式化した時の方法に従うことになるであろう。

6 テーマ I に関わる課題の編成：パラダイムシフトをめぐって

パラダイムシフトそのものは社会化概念 B の定式化とは直接関わっているわけではない。しかしパラダイムシフトによって社会化概念に根本的变化が生じた可能性があるのであるからその検証が必要であろう。

もともとパラダイム自体が実証的な検証対象となりにくいものであるため、ここでできることは社会化の研究者コミュニティにおいて社会化についての考え方に変化が生じたということを示すくらいのものであろう。

しかし社会化についての考え方といっても様々な側面やレベルがある。そのために同一パラダイム下における部分的な変化もこれに含まれることになる。そうすると社会化研究にお

いてとらえられた変化がパラダイムシフトに関わる変化なのか、あるいはそれとは関係のない変化なのかの区別がつきにくくなる。

この問題を回避するために本研究では社会化についての考え方のもっとも根底的な部分、すなわち社会化の概念自体に焦点をあわせる。

(1) 作業課題：社会化の概念構成における変化

社会化研究においてパラダイムシフトが生じていたなら、その前後における社会化の考え方にもそれが反映されているだろう。すなわちパラダイムシフト前の社会化概念 A1 とパラダイムシフト後の社会化概念 A2 との間には根本的な相違が認められるはずであるし、同様に社会化概念 B1 と社会化概念 B2 においても同じことが認められるはずである。このためにこれらの社会化概念の比較分析の作業がおこなわれることになる。

(2) 作業課題：先行事態と帰結事態における個人と社会

社会化という考え方はもともと個人と社会の双方を視野に入れて社会現象を理解し説明するために考案された概念装置という性格をもっている。したがって社会化の概念には個人と社会の関係が組み込まれているか、あるいは暗黙のうちに想定されているはずである。

個人と社会の関係はおそらく先行事態、活動事態、および帰結事態という3つの事態においてもっともはっきりと認めることができるであろう。すなわちこれら3つの事態における個人の変化が社会のあり方と結びつけられてとらえられているはずである。

社会過程論的パラダイムにおいては3つの事態を経由する個人の変化が社会過程と結びつけられているだろう。すなわち社会化による個人の変化が、帰結事態において、社会の変化をもたらすと想定されているだろう。また社会構造論的パラダイムにおいては3つの事態を経由する個人の変化が社会構造と結びつけられているだろう。すなわち社会化による個人の変化が、帰結事態において、社会の維持存続をもたらすと想定されているだろう（大江；2013b）。

(3) 作業課題：社会過程論的パラダイム期間の社会化の研究者コミュニティーの形成

パラダイムシフト仮説の検証とはパラレルに注意を向けておくべき点がもう1つある。それは社会過程論的パラダイムははたして社会化の研究者コミュニティーにおいて形成されたものであるか、という問題である。

社会過程論的パラダイムの期間は社会化研究そのものが学的歴史の緒についた期間であることを考慮すると、社会化の研究者コミュニティーがまだ形成されていなかった可能性がある。もし社会過程論的パラダイムの期間に社会化の研究者コミュニティーが形成されていなかったなら、あるいは形成されていない時期があったなら、その期間では共通のアカデミック・リアリズムも形成されておらず、したがって社会過程論的パラダイムとは異質のものも

リアルなものとして認める研究者もいた可能性もあり、それゆえに社会化概念 A1 と社会化概念 B1 には多様な内容が括られる可能性があるからである。

このために社会化の研究論文の引用参照の相互性や研究者間の議論の程度をみていくことになるであろう。

文献

- 秋元律郎 1993 社会学史 森岡清美・塩原勉・本間康平（編）新社会学辞典 有斐閣、602-603.
- Child, I.L. 1954 Socialization In Lindzey, G. (Ed.) *Handbook of social psychology vol. II* Cambridge, Mass.: Addison-Wesley Publishing Co., 655-692.
- Clausen, J.A. 1968a A historical and comparative view of socialization theory and research In Clausen, J.A. (Ed.) *Socialization and society* Boston: Little, Brown and Company, 18-72.
- Clausen, J.A. 1968b Introduction In Clausen, J.A. (Ed.) *Socialization and society* Boston: Little, Brown and Company, 1-17.
- Dietrich, K.T. and Picou, J.S. 1998 Theory and methodology in family socialization *Marriage & Family Review*, 27(1-2), 3-18.
- Geulen, D. 1980 Die historische Entwicklung sozialisationstheoretischer Paradigmen In Hurrelmann, K. und Ulich, D. (Hrsg.) *Handbuch der Sozialisationsforschung* Weinheim und Basel; Beltz Verlag, 15-49.
- Geulen, D. 1991 Die historische Entwicklung sozialisationstheoretischer Ansätze In Hurrelmann, K. und Ulich, D. (Hrsg.) *Neues Handbuch der Sozialisationsforschung, 4., völlig neubearbeitete Auflage* Weinheim und Basel; Beltz Verlag, 21-54.
- Goodman, N. 1985a Socialization: I. A sociological overview *Studies in Symbolic Interaction*, Suppl.1, 73-94.
- Goodman, N. 1985b Socialization: II. A developmental view *Studies in Symbolic Interaction*, Suppl. 1, 95-116.
- 今田 恵・今田 寛 1981 心理学史 藤永保, 他 (編) 新版心理学事典 平凡社, 440-443.
- Inkeles, A. 1968 Society, social structure, and child socialization In Clausen, J.A. (Ed.) *Socialization and society* Boston: Little, Brown and Company, 73-129.
- Inkeles, A. 1969 Social structure and socialization In Goslin, D.A. (Ed.) *Handbook of socialization theory and research* Chicago, Ill.: Rand McNally and Company, 615-632.
- Jones, E.E. 1985 Major developments in social psychology during the past five decades In Lindzey, G. and Aronson, E. (Eds.) *Handbook of Social Psychology (third ed.) vol. I Theory and Method* New York, NY: Random House, 47-107.
- Maccoby, E.E. 1992 The role of parents in the socialization of children: An historical overview *Developmental Psychology*, 1992, 28(6), 1006-1017.
- Maccoby, E.E. 2007 Historical overview of socialization research and theory In Grusec, J.E. and Hastings, P.D. (Eds.) *Handbook of Socialization: Theory and Research* New York, NY: The Guilford Press, 3-41.
- 大江篤志 1973a 地域構造と青年期社会化との関係に関する社会心理学的研究—宮城県江島地域における社会化条件とその変容— 年報社会心理学, 第 14 号, 219-235.
- Ooe, A. 1973b Research on a selection of socialization channel by early youth at the Island of Enoshima, Miyagi Prefecture in Northeast Japan *Tohoku Psychologica Folia*, 32(1-4), 78-90, Tohoku University.

- 大江篤志・細江達郎 1974 宮城県江島における青年期の社会心理学的調査研究—地理的に隔離された状況における「地域構造と青年期の適応空間」をめぐって— 日本文化研究所研究報告 別巻第11集, 19-41, 東北大学, 日本文化研究所.
- 大江篤志・菊池武尅・細江達郎 1976 老年期の社会化過程に関する社会心理学的研究—下北半島の一漁村における老年期を中心として— 日本文化研究所研究報告別巻第13集, 91-106, 東北大学・日本文化研究所.
- Ooe, A. 1978a Adult socialization, the younger generation and changing environment — A research on occupational adjustment process of Japanese fishermen — *Tohoku Psychologica Folia*, 37 (1-4), 56-63, Tohoku University.
- 大江篤志 1978b 社会化概念をめぐる諸問題—序報— 山形女子短期大学紀要, 第10号, 37-71, 山形女子短期大学.
- 大江篤志 1980 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (I)—宮城県江島地域における地域漁業回帰者の職業的再社会化過程— 東北学院大学論集 (一般教育), 第69号, 19-40, 東北学院大学.
- 大江篤志 1981 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (II)—宮城県江島地域における離村展望とその成立基盤— 東北学院大学論集 (一般教育), 第72号, 1-42, 東北学院大学.
- 大江篤志 1982 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (III)—中卒時社会化水路選択とその準拠枠— 東北学院大学教育研究所紀要, 第1号, 15-26, 東北学院大学.
- 大江篤志 1983 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (IV)—青年と成人の社会化の相互作用— 東北学院大学教育研究所紀要, 第2号, 41-64, 東北学院大学.
- 大江篤志 1984 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (V)—中卒時社会化水路選択にたいする認知と態度— 東北学院大学教育研究所紀要, 第3号, 19-42, 東北学院大学.
- 大江篤志 1985 地域構造と個人の社会化過程との関係に関する社会心理学的研究 (VI)—中卒時社会化水路選択にたいする認知と態度— 東北学院大学教育研究所紀要, 第4号, 55-86, 東北学院大学.
- 大江篤志 1986a 社会化概念の属性に関する基礎的研究 東北学院大学教育研究所紀要, 第5号, 1-57, 東北学院大学.
- 大江篤志 1986b 伝統漁撈をめぐる社会化 (上) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第18号, 1-72, 東北学院大学.
- 大江篤志 1987 伝統漁撈をめぐる社会化 (中) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第19号, 1-40, 東北学院大学.
- 大江篤志 1989 伝統漁撈をめぐる社会化 (下) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第21号, 45-98, 東北学院大学.
- 大江篤志 1990a 社会化 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ3: 集団から社会へ, 219-236, 誠信書房.
- 大江篤志 1990b 伝統漁撈をめぐる社会化 (下・2) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第22号, 29-101, 東北学院大学.
- 大江篤志 1991 伝統漁撈をめぐる社会化 (下の三) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第23号, 37-97, 東北学院大学.
- 大江篤志 1992 伝統漁撈をめぐる社会化 (下の4) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第24号, 29-88, 東北学院大学.
- 大江篤志 1994 伝統漁撈をめぐる社会化 (下の5) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第26号, 39-84, 東北学院大学.
- 大江篤志 1995 伝統漁撈をめぐる社会化 (下の6) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第27号,

- 47-79, 東北学院大学.
- 大江篤志 1997 地域社会の過疎—高齢化過程と青年期社会化水路の変容との関係についての社会心理学的研究 (I) 東北学院大学教育研究所紀要, 第 16 号, 1-66, 東北学院大学.
- 大江篤志 1998 地域社会の過疎—高齢化過程と青年期社会化水路の変容との関係についての社会心理学的研究 (II・完結) 東北学院大学教育研究所紀要, 第 17 号, 1-76, 東北学院大学.
- 大江篤志 2002 過疎—高齢化地域における伝統漁撈—南三陸江島アワビ鉤漁の社会心理学的研究— 博士学位論文, 東北大学.
- 大江篤志 2004a 地域社会の変容—漁村の過疎・高齢化— 大橋英寿 (編) フィールド社会心理学, 162-181, 放送大学教育振興会.
- 大江篤志 2004b 伝統漁撈の再編—アワビ漁の現在— 大橋英寿 (編) フィールド社会心理学, 182-200, 放送大学教育振興会.
- 大江篤志 2005a 水域から見た離島漁村の変容過程—南三陸江島地域のフィールドワーカー— 社会学年報, No. 34, 57-76.
- 大江篤志 2005b 伝統漁撈をめぐる社会化—アワビ鉤漁開口における漁業者の波浪認知— 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第 37 号, 13-72, 東北学院大学.
- 大江篤志 2005c 社会化研究の源流と展開: 1—学史の射程をめぐる問題— 日本社会心理学会 第 46 回大会論文集, 712-713.
- 大江篤志 2007a 伝統漁撈をめぐる社会化 (下の七) 東北学院大学 東北文化研究所紀要, 第 39 号, 1-30, 東北学院大学.
- 大江篤志 2007b 社会化研究の源流と展開: 2—学史の方法論 (1): 歴史記述の方法論確定のための素材の選定— 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 622-623.
- 大江篤志 2008 社会化研究の源流と展開: 3—学史の方法論 (2): 課題の設定に向けて— 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 254-255.
- 大江篤志 2009a 社会化の社会心理学 細江達郎・菊池武剋 (編) 新訂社会心理学特論, 75-87, 放送大学教育振興会.
- 大江篤志 2009b 地域の社会心理学 細江達郎・菊池武剋 (編) 新訂社会心理学特論, 143-161, 放送大学教育振興会.
- 大江篤志 2009c 社会化研究の源流と展開: 4—学史の方法論 (3): 社会化における相互作用結果の偶然性と必然性— 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 10.
- 大江篤志 2010a 社会化概念再考 菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二 (編) 社会化の心理学/ハンドブッカー人間形成への多様な接近, 3-18, 川島書店.
- 大江篤志 2010b 伝統漁撈をめぐる社会化 (下・8) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第 42 号, 27-47, 東北学院大学.
- 大江篤志 2010c 社会化研究の源流と展開: 5—学史の方法論 (4): 社会化における分析単位の時空間的拡がり— 日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 4.
- 大江篤志 2011 社会化研究の源流と展開: 6—課題の設定に向けて (1): 検討課題の整理と確認— 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 15.
- 大江篤志 2012 伝統漁撈をめぐる社会化 (下・9) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第 44 号, 1-60, 東北学院大学.
- 大江篤志 2013a 伝統漁撈をめぐる社会化 (下・10 完) 東北学院大学東北文化研究所紀要, 第 45 号, 23-58, 東北学院大学.
- 大江篤志 2013b 社会化研究の源流と展開: 7—課題の検討に向けて (2): 社会過程論から社会構造論へのパラダイム変換 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 1.
- 大江篤志 2014 社会化研究の源流と展開: 8—課題の検討に向けて (3): ジンメルにおける 2 つの社会化— 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 5.
- Sewell, W.H. 1963 Some recent developments in socialization theory and research *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 349, 163-181.

新村 出 1998 広辞苑（第五版）岩波書店.

Wentworth, W.M. 1980 *Context and understanding : An inquiry into socialization theory* Oxford, N.Y : Elsevier.